

Viva Arte No.6

文化研究講座 ～6/15 歌劇「バスティアンとバスティエンヌ」 「奥様女中」～

みなさん、こんにちは！

文化研究講座をより楽しむために、ちょっとした知識などを
学生の視点からわかりやすく紹介します！

今回は、今年度第四回文化研究講座で、オペラについて、
オペラ：モーツァルト作曲「バスティアンとバスティエンヌ」、
ペルゴレーシ作曲「奥様女中」についてご紹介します！

I オペラとは？ 舞台芸術で、クラシックバレエやミュージカルなどは、どんなものかと聞かれればすぐに答えられるでしょう。ではオペラは？と聞かれるとどうでしょう。私たちにあってあまり馴染みがない芸術というのがわかります。

オペラは、歌ですべての台詞を歌い、物語が進められる劇です。役者つまりオペラ歌手は、歌いながら演技をします。舞踊が加わることもあります。オペラは日本語で、意味そのまま「歌劇」と訳されています。歌の伴奏はオーケストラによるものがほとんどです。外国人によるオペラは、イタリア語やドイツ語で歌われるのでわからないのでは？と敬遠する方もいらっしゃると思います。でも大丈夫！舞台の袖や上部に電光掲示のパネルが置いてあり、そこに日本語訳が出るのです。映画の字幕のような感覚で鑑賞できます。オペラで有名な作品と言えば、「蝶々夫人」、「カルメン」、「椿姫」などが挙げられますが、実はグリム童話の「ヘンゼルとグレーテル」もオペラとして上演されています。作曲者のフンパーティングは、実妹に「家庭用の音楽劇を作ってほしい」と言われ作曲を始めました。子供にも聴きやすい音楽になっていますので、みなさんも鑑賞してみたいはいかがでしょうか？

II オペラの誕生 日本ではちょうど江戸時代に入る頃の1600年頃、イタリアのフィレンツェでオペラは初めて上演されました。フィレンツェの貴族ジョヴァンニ・デ・バルディ伯爵家に集まった仲間が、「古代ギリシャ悲劇を復活上演しよう！」と言いだしたことが、オペラの始まりだったのです。ギリシャ悲劇は、仮面をつけた俳優と合唱団との掛け合いによって物語が進んでいきますが、ジョヴァンニ・デ・バルディ伯爵家に集まった仲間は、このギリシャ悲劇を模範に、歌うようなセリフを用いた劇をしたいと考えました。この小さな試みから始めて、後に世界中に広まったのです。

オペラ第一作目はペーリ作曲の『ダフネ』とされていますが、現存しておらず、現存の最古の作品は、同じくペーリ作曲の『エウリディーチェ』です。クラシック音楽の歴史から見ると、この時代はバロック音楽の時代です。バロック音楽の代表的な作曲家と言えば、ヴィヴァルディやヘンデル、バッハなどがいますが、華やかさが印象的なこの頃の音楽は、華やかな貴族の生活を思わせます。この頃のクラシック音楽からもわかるように、貴族たちはオペラに多額のお金を費やしていました。こうしてバロック時代に多くのオペラ作品が生まれたのです。



Ⅲ 日本のオペラ

日本で初めてオペラが上演されたのは、横浜でした。1870年、横浜の外国人居留置の中国人のための中華劇場で、アメリカ人かイギリス人のアマチュアのオペラ歌手「コックスとボックス」という作品を上演したのが、日本オペラのはじまりだそうです。その後、在日外国人のアマチュア団体や海外からやってくるプロのオペラ歌手のために、横浜や東京に劇場が次々とオープンしました。

日本人の手で最初に上演された本格的なオペラは、1903年に、現在の東京芸術大学音楽学部の前身、東京音楽学校の奏楽堂で行われました。上演された作品は「オルフェオとエウリディーチェ」（当時は「オルフィス」と呼ばれていた）。ピアノ伴奏や衣装のデザイン、演出等は外国人指導者立ち会いで作り上げられましたが、歌手や舞台美術等は日本人でした。この日本人によるオペラ初演作品「オルフェオとエウリディーチェ」にも出演し（エウリディーチェ役）、日本のオペラ界に多大な功績を残したのは、三浦環というソプラノ歌手でした。東京音楽学校では、「荒城の月」などを作曲した滝廉太郎にピアノを師事し、卒業後はドイツに留学。そこでオペラを学びます。その後は世界各地でオペラ歌手として主役をこなし、日本帰国後は若手の育成に尽力しました。三浦環に続き、日本のオペラを本格化しようと立ち上がったのが、藤原歌劇団創設者の藤原義江です。藤原歌劇団は日本初のオペラ歌劇団として、1934年に創立し、現在も日本のオペラ界をリードする代表的なオペラ団として活躍しています。

Ⅳ 新国立劇場

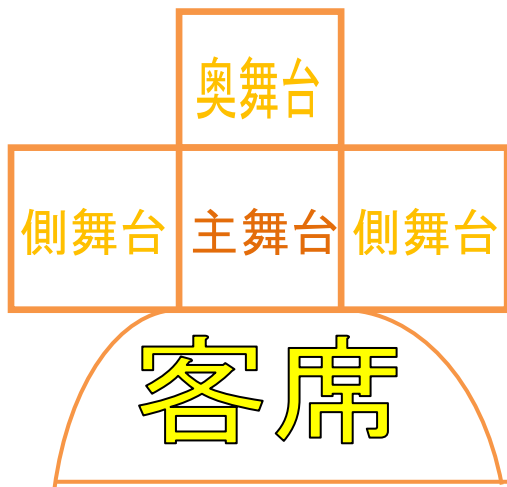
みなさんは日本で初めてのオペラハウスをご存じですか？東京の初台にある、新国立劇場が日本で初めてのオペラハウスです。

オペラ、バレエ、演劇などの現代芸術を上演するために作られました。1970年から設置の動きが出ていましたが、建築計画が本格化したのは1990年代に入ってからで、構想からおよそ30年後の1997年に完成しました。新国立劇場には3つの劇場があり、大きい順にオペラ劇場、中劇場、小劇場となります。



新国立劇場 外の写真

一番大きいオペラ劇場は、約1800の客席があります。客席は馬蹄型^{ばていがた}という造りになっており、3層のバルコニーが舞台を包み込むような形になっています。まるでヨーロッパのオペラハウスを再現したかのようです。壁や天井は、歌手の歌声が響きやすいように厚い木材で作られ、その響きには定評があります。またオーケストラピットもフル編成120人で演奏することができるように作られました。



オペラ劇場 舞台と客席
全4面舞台がありますが、オペラ上演のためにこのような造りになっています。奥舞台、側舞台（上手下手）は隠れていますが、装置転換のための準備に使います。これにより、大掛かりな演出が可能となったのです。

1997年10月10日の開場の際には、天皇皇后両陛下もご臨席されました。また、オペラ、バレエ、演劇という新国立劇場の3軸によるそれぞれの開場記念公演が上演されました。オペラは「アイーダ」、「ローエングリン」、バレエは「眠れる森の美女」、「くるみ割り人形」、演劇は「リア王」、「夜明け前」が上演されました。バレエ「眠れる森の美女」では、世界的に活躍しているバレエダンサー熊川哲也や吉田都をゲストに迎えて上演されました。



新国立劇場 中の様子

オペラに必要な発声法や演技はもちろん、作品の理解と歌唱に必要な諸外国語習得のための授業もあります。毎年試演会（発表会のようなもの）を2回、年度末に本格的なオペラ公演を実施し、修了予定者による修了公演も行われます。また新国立劇場のみならず、外でのコンサートも行っているそうです。修了生は、新国立劇場でのオペラ公演への出演はもちろん、海外劇場でデビューするなど幅広い活躍をしています。

V バスティアンとバスティエヌ

有名な「トルコ行進曲」やオペラ「フィガロの結婚」を作曲したモーツァルトが、このオペラの作曲者です。3歳でクラヴィーア（ピアノの前身）を習い始め、5歳で作曲を始めるようになりました。では「バスティアンとバスティエヌ」は何歳の時に作曲したと思いますか？ 答えは12歳。モーツァルトは12歳までに、およそ60曲を作曲したと言われています。登場人物はわずか3人、上演時間は1時間に満たない作品です。

主人公は少年バスティアンと少女バスティエヌ。ともに羊飼いで恋人同士です。バスティエヌは男ぶりが良いので、都会の女たちからデートの誘いが頻繁に来ます。そんなボーイフレンドの姿を見て、寂しくなったバスティエヌは嘆き続けます。そこで登場する自称魔法使いのコラが、バスティエヌに秘策を授けます。「男のころを取り戻すには、あんに新しく別の男が出来た」ふりをするというのがその策であると、コラは言います。そんな矢先、バスティアンが登場。コラは「バスティエヌは他の男に恋をした」と嘘を告げます。バスティエヌはコラの指示通り、バスティアンに対して冷たいそぶりを見せます。二人はコラの思うままに翻弄されますが、最後には仲直りし、結婚の約束をします。



一見単純な話ですが、このオペラを鑑賞していた18世紀後半の貴族に受け入れられたのはなぜでしょうか。当時の社会では、人は働く人と働かない人（税金を納める人と受け取る人）の二種類に分かれており、その働かない人（税金を受け取る人）たち、つまり貴族たちは暇つぶしにさまざまな物事への中傷をし、陰謀をめぐらせていました。それまでは女たちの文化と言えは飾った表現や洗練された言葉づかい、複雑な言葉遊びなどが主流でしたが、その過度に洗練された文化を嫌い、逆に素朴な世界、飾らない世界に還ろうという運動が始まり、宮廷文化の中に入ってきました。この“自然に還れ”という考えを、現実の人間世界に投射してみると、この考えに最もふさわしい生き様をしている人間とは、どうやら羊飼いだっらしいのです。富などから程遠く、私欲なしに貧しく暮らし、日の出から日没まで自然の中で自然と対話して暮らす人間を、彼らは羊飼�티という職業だと考え、羊飼�티を彼らのスローガンの象徴的存在として敬うようになりました。宮廷のどろどろした社会を悪と考えるとき、それと真逆の善であると考えられたのが、“羊飼�티”でした。贅沢を通り越した世界の果てに見えてくる素朴な風景への憧れ、それを舞台化したのが「バスティアンとバスティエヌ」です。

この作品の原作は、「人には二回の誕生がある。一つは、世に現れた誕生、一つは生活に入る誕生である。」などの名言を残した、ジャン・ジャック・ルソーが書きました。ルソーも“自然に還れ”という思想を強く抱いていた人物であり、このオペラはルソーのヴェルサイユ宮殿のような豪華絢爛な世界へのアンチテーゼでした。あのマリー・アントワネットも、この頃の貴族社会に生きていました。彼女も“自然に還れ”という考えから、ヴェルサイユ宮殿の小さな一角にイギリス式庭園（人工的でなく、自然な設計）を作り、そこで簡素な生活を送っていたそうです。



新国立劇場で上演されたオペラの衣装展示

Ⅵ 奥様女中

ジェンナート・アントーニオ・フェデリコの台本による「奥様女中」は、二人の作曲家が存在したと言われていました。一人はペルゴレージ、もう一人はジョヴァン

ニ・パイジエッロです。今回の文研ではペルゴレージの「奥様女中」が上演されるので、ペルゴレージについて紹介します。ペルゴレージは、1710年に生まれたイタリアの作曲家です。結核のため、26歳という若さで亡くなりました。イタリアのフランチェスコ・サンティに音楽の基礎教育を受けたのち、派遣されて1723年ごろから31年にかけてナポリ音楽院に学びました。彼が23歳の時、オペラ・セリア「誇り高い囚人」の幕間劇（インテルメッツォ）として作曲されました。インテルメッツォとは、“中間”を意味するラテン語の転化したイタリア語です。「奥様女中」は、上演されると大評判となりました。特にパリ公演の後、この作品を支持する派と反対派に分かれ、およそ2年に亘って、イタリアのオペラなのかフランスのオペラなのかという論争がなされたそうです。この作品は、オペラ・ブッフア（コメディのようなオペラ）の先駆になると同時に、彼の代表作にもなりました。初演は1733年。こちらも一時間に満たない作品で、登場人物は3人です。

金持ちで頑固な老人ウベルトは、子供の頃から女中に雇っている娘セルピーナが、近頃大きな態度をとり出したことに腹を立てています。今日もウベルトに従わないセルピーナは、ウベルトにうるさいとばかりに平手打ちを一発浴びせ、そればかりか反省の色も見せません。怒ったウベルトは彼女にあきれ果て、自分は結婚することにしたから出て行けとセルピーナを怒鳴りつけますが、セルピーナは、「結婚なら自分とすればよい、本当は私がお好きなのでしよう！」と強引にウベルトの気を引きます。その日の午後、ウベルトと結婚するためある計画を思いついたセルピーナは、下男のヴェスポーネに軍服を着せ、丸めこみ暴れさせます。慌てたウベルトは、うっかり結婚の誓いをしてしまいます。その途端、セルピーナはヴェスポーネの変装を解いて種明かしをし、ウベルトは激怒しますが、小悪魔のように可愛らしいセルピーナの魅力に負け、二人はめでたく結婚することになりました。

いかがでしたでしょうか？

ご意見・ご感想、リクエスト等ありましたら、

viva_arte_2010@yahoo.co.jp にメールください！！

お待ちしております♪

担当：現代教養学科 3年 Viva Arte 編集部

<参考文献一覧>

河原廣之『対訳 奥様になった女中/悲しみの聖母』（オペラ読本出版,2004） 佐川吉男『日本オペラの軌跡-歩み、作品、人』（芸術文化社,2006）

西村理『もう一度学びたいオペラ』（西東者,2007） 神木勇介『オペラにいこう！楽しむための基礎知識』（青弓社,2007）

モーツァルト雑学委員会『モーツァルトおもしろ雑学事典』（株式会社ヤマハミュージックメディア,2006）

石井宏『歌劇 バスティアンとバスティエンヌ 全曲』（ユニバーサルミュージック,2006）

オペラ・データベース <http://www.and.or.tv/operaoperetta/182.htm>

Yahoo!百科事典

ペルゴレージ <http://100.yahoo.co.jp/detail/%E3%83%9A%E3%83%AB%E3%82%B4%E3%83%AC%E3%83%BC%E3%82%B8/>

オペラ・ブッフア

<http://100.yahoo.co.jp/detail/%E3%82%AA%E3%83%9A%E3%83%A9%E3%83%BB%E3%83%96%E3%83%83%E3%83%95%E3%82%A1/>

（閲覧日：2010年6月5日）